

古典インドの「沐浴」

——『ラーマーヤナ』を中心として——

森 真 理 子

はじめに 聖なる川ガンジスでの沐浴は今日あまりにも有名で、ヒンドゥー教の宗教儀礼を考える上で欠かすことはできない。わが国の水垢離や禊や日常的な入浴とも関連を持つ清潔の保持・汚れの除去・清め・浄化としての沐浴の意義・役割は概ね理解されているとはいえ、インドの沐浴やそれを可能とする水、ガンジス川そのものについての、文献に即した具体的な掘下げは、未だ不十分である。

健康維持と病氣予防・治癒に果たす沐浴や水についての論及を含む『チャラカ本集』*Carakasamhitā*: Cs, 『スシュルタ本集』*Suśrutasamhitā*: Ss などのインド古典医学文献と、業に付随する様々な汚れの除去と罪業の浄化に関わる贖罪法の数々をも網羅的に記す『マヌ法典』*Manusmṛti*: Ms を通して、沐浴と水に関わるインド人の思弁と意義を確認する。併せて、それらのインド的日常生活への具体的一展開と見なし得る『ラーマーヤナ』*Rāmāyaṇa*: R 全篇における沐浴の用例を精査し、それに関連する王の灌頂との関係を考究し、沐浴についての総合的な知見を模索したい*。

水、沐浴と法典・医学書 沐浴とは「なにがしかの水を用いて、身体ないし身体の一部を洗い流す営み」とまずは理解される。汚れている状態から汚れのない状態に、つまり浄化し清浄な状態にすることがその目的である。そうした沐浴に関わる記述を、サンスクリット表現を顧慮して Ms と Cs と Ss の中に探る。

沐浴という営みを展開する場所を沐浴場と言う。そこにはなにがしかの水が存在する。水のない沐浴はあり得ない。初めからそこに水がある場合と、沐浴のために他の場所から運んでくる場合とがある。前者の場合、そこは川、池、沼、泉、湖、海と呼称される。後者の場合、その場所には「沐浴用の水」を容れておく人工的な容器が必要となる。土製の壺・瓶とか金や銀などで鑄造された容器である。沐浴と一口に言っても、自分自身に対して施すもの（＝通常の意味での沐浴、自主的沐浴）か他者による場合（＝受動的沐浴、灌頂）かがある。他者が命じて沐浴させる場合（＝強制的沐浴）もあろう。また水があれば直ちに沐浴が成立するわけ

でもない。沐浴の水にも適不適がある。沐浴に作法があるのならそれも考慮すべきであろう。そうした沐浴をめぐる諸事情を念頭に置いてテキストをたどる。

Ms IV-23 には、常時、川、池、泉などでの沐浴を心掛けるべきことが記される。Ms V-66, V-85, V-88 などでは、沐浴によって身体を持つ者の汚れの浄化が為されると説かれる。Ms V-105 は、身体を持つ者 (dehin) の汚れの浄化アイテム (śuddheḥ kartṛ) は、沐浴を可能にする水 (vāri) の他に、知識 (jñāna), 苦行 (tapas), 火 (agni) など他に多々あると記す。Ms V-106, V-109, V-111, V-112 は、汚れの内実は複雑で、したがってそれらの浄化具も複合的な様相を呈すると告げる。特に Ms V-113 は、そうした汚れの実質と浄化具の理論的關係、浄化のメカニズムにまで及んだものとして注目すべきであろう。すなわち、あるもの X の汚れは、そのあるもの X を生み出す〈母胎となるもの (yonī)〉によってでしか浄化されないと説いている点は重要であろう。つまり、そこでは「金製の〔容器〕 (haima) と銀製の〔容器〕 (raupya) は、水 (ap) と火 (agni) の結合によって生じた。したがって、その両〔容器〕の適正な (guṇavattara) 浄化 (nirṇeka) は、他ならぬ、それら自身の母胎〔水と火の両者〕 (yonī) によるであろう」。また Ms V-128 は、水アイテムに限っても、水であれば何でもいいというわけではない、水のある場所と状態も問題となると説いている。あるいは、Ms V-139 は、水による浄化 (沐浴) と言っても、汚れの保有者の如何に応じて独自の手順・作法のあることを説いている。

では、インドにあって最も手軽な浄化の営みであるように見えるこの沐浴に関して、Cs や Ss といった古典医学書はどのようなことを言っているだろうか。医学でも沐浴を可能とする水アイテムは重要であり、それが果たす役割は広範多岐にわたっていると容易に想像がつく。ここでは、その一端を垣間見るに止める。

Cs I-5-94 は、「沐浴 (snāna) は、浄化し (pavitra), 強化し (vr̥ṣya), 増命するもの (āyusya) にして、疲労 (śrama) と汗 (sveda) の汚れ (mala) を除去し (apaha), 身体 (śarīra) の力 (bala) を付与する (sandhāna), 最高の (para) 活力源 (ojas-kara) である」と言う。つまり、沐浴は生命の科学たる医学 (āyurveda) の見地よりすれば、「浄化を為すもの」pavitra に尽きるものではない。そこでは、最高の、「活力源」ojas-kara であると表現されている。同じことが、「中空水 (āntarikṣa-pāṇīya) は、不可説の (anirdeśya) 味 (rasa) を持ち、甘露 (amṛta) にして生命を付与し (jīvana), 満足を与え (tarpana), 保持し (dhāraṇa), 回復をもたらし (āśvāsa-janana), 疲労 (śrama) ・衰弱 (klama) ・渇き (pipāsā) ・興奮 (mada) ・失神 (mūrcchā) ・倦怠 (tandrā) ・眠気 (nidrā) ・ほてり (dāha) を鎮め (praśamaṇa), 絶対的に (ekāntatas), 最も有効で (patya-

tama) ある」と記す Ss I-45-3 より、見てとることができる。さらに、続いて「降ったその[中空水]は、川 (nadi), 川 (nada), 湖 (saras), 貯水池 (taḍāga), 池 (vāpi), 井戸 (kūpa), 小井戸 (cuṇṭi), 細井戸 (prasravaṇa), 泉 (udbhida), 透過水 (vikira), 草地 (kedāra), 水溜り (palvala) 等の諸状態に住止する (avasthita) のであるから、状態の差異 (sthāna-viśeṣa) に基づいて、いずれかの (anyatama) 味 (rasa) を取る」と記す Ss I-45-4 からは、先に見た Ms V-128 などと同様に、「水」と一口に言っても、その在処などの状態によって、沐浴に対する適不適などが厳然とあって、その効能・機能も一律には論じ得ないことを説く。

インドの古典医学書に於ける水と沐浴についての論究は、優に一つの独立の研究対象になるはずである。現に、その成果も既にかかなり蓄積されていると想像されるが、その成果が一般のインド文化、思想史研究の中で十分に活用されているようには思われない。本研究もそのための準備作業ではあっても、そのことを中心に謳ったものではない。以上の Ms と Cs, Ss のごく限られた用例の検討からだけでも、インド文化に果たす水と沐浴の役割の大きさは推し量れたと考える。

R と水, 沐浴 (1) 本節では、R 全篇に窺われるインド人の日常生活の中で、この水と沐浴がどのような役割を果たしているかを、やはりサンスクリット表現に注意を払いながら、実際の用例のうちに眺めてみたい。

最初に注目すべきは、川の中の最上者 (saritām śreṣṭhā) たるジャフナヴィー川 (R I-35-6) = 三道を行く (tri-patha-gā) 川 (nadi) たるガンジス川 (gaṅgā) (R I-35-11) の出現である。R の中で、ガンジス川はしばしば三道を行く川と呼称される。その三道の意味するところは必ずしも明確ではないが、「最初に、道を持つ者 (gatimat) たちにとっての道 (gati) たる空 (kha) を行き、[次いで] 神々の世界 (sura-loka) に上り (samārūḍhā), [地上に到っては] 水を運び (jala-vāhini), 悪業を洗い流すもの (vipāpā)」(R I-35-22) として描かれる。古典インド世界にあって、最高の沐浴の水、最高の浄化の水の供給場所としてのガンジス川を知らずして、水と沐浴を語るなかれと言い得るほどである。長大な R 物語の中の第一巻が、「ガンジス女神 (gaṅgā) の降下」をめぐるやや複雑な神話を背景として持つことで、〈ガンジス川の水の卓越性〉が保証される。ここでは、「[水 (salila) は、] 一瞬、上方の道 (ūrdhva-patha) に赴いた後、再び、地 (vasudhā) に下った。シヴァ神 (śaṅkara) の頭 (śiras) から下ったその[水]は、再び、地面 (bhūmi-tala) に、落ちた。(25)／その時、汚れなき (vimala), 罪障を清算した (gata-kalmaṣa), 水 (toya) が、輝いた。その[水]に、聖仙群 (ṛṣi-gaṇa) や地面の住人 (vasudhā-tala-vāsin) たちは (26), 《シ

ヴァ神 (bhava) の肢体 (aṅga) より落ちた水は、浄化するもの (pavitra) である》と言って、接触した。また、呪詛 (śāpa) のために天空 (gagana) より地面 (vasudhātala) に落ちた (paspr̥sus) ところのそれらの者たちは、そこで、沐浴 (abhiṣeka) を為した後、罪障を清算した者となった。再び、その水によって、悪業 (pāpa) を払拭し (dhūta), 次いで、清純さ (śubha) を具足し、再び、虚空 (ākāśa) に入った後に、自らの (sva) 世界 (loka) に、到達した。その輝ける水によって、世界は、喜び (mudita), 一つとなった (mumude). (29) ガンジス川 (gaṅgā) で沐浴をして (kṛta-abhiṣeka), 「世界は、」 罪障を清算したのである。」(R I-43-25~30a) などの記述を通じて、ガンジス川はガンジス女神の化身とのその神話の全容を想像することに止めたい。

R 全篇の最初から、きわめてしばしば現れる、ガンジス川／ガンジス女神の別称たる「トリパタガー」 tri-patha-gā, すなわち「三道を行く女」の「三道」も必ずしも明らかにならないとはいえ、いわゆる「天界・地上界・地下（地獄）界」という三界 (tri-loka) を顧慮した結果の呼称だとすると、ガンジス川の水の流れは、神々の住まう天界とわれわれ人間の住む地上界とその下に広がる地下世界（地獄界）という三界を貫流する稀有なる川ということになる。その水は、したがって身体表面に付着した汚れを洗い流す、きれいな水以上のものである。われわれ生類にとっての昇天を阻む〈汚れ〉たる〈罪業〉を洗い流し、浄化するものである。ここではこれ以上触れないが、ガンジス川に対するこの意味づけは、R 全篇の終結部に描かれる有名な「昔、プラジャーパティ (prajāpati) は、水より生じて (salila-sambhava), 水 (ap) を創造した後に (sṛṣṭvā), 蓮華から生じて (padma-sambhava), それら「水たち」を、守護するために、生類 (sattva) を創造した」(R VII-4-9) との記述を改めて想起した上で、さらに「すべての者たちは、喜び (harṣa) に溢れた涙 (aśru) に動揺し、サラユー川 (sarayū) に入った。かれらはそれぞれ水で沐浴し (avagāhya^apsu), 呼吸 (prāṇa) を断ち (tyaktvā), 喜べる者のように (prahr̥ṣṭavat), 人間の (mānuṣa) 身体 (deha) を捨離し (utsṛjya), 天空車 (vimāna) に乗った (adhyarohata). そして、畜生胎にあった何百もの者たちが、サラユー川の水 (sarayū-jala) を得て、光り輝く (prabhāsura) 美体 (vapus) を持って、天界 (tri-diva) に赴いた。[彼らは] 天の (divya) 美体により、輝ける神々のような、天なる者 (divya) になった。」(R VII-110-23~25) を味読すべきであろう。ここには、ガンジス川に収斂すべきサラユー川、及びその水をめぐる清冽な光景が描き出されている。ナラに向けて発せられたダマヤンティーのあの「もしあなたが、あなたを愛

しているわたしを拒否するのなら、あなたのせいで、わたしは毒に、火に、水(jala)に、縄に頼るでしょう」との悲壮なことばを想起してもいい。先にも見た、Xの浄化は、Xの母胎／質料因によってのみ可能であると明言するMs V-113を想起してもいい。水から生まれたXは、水によって浄化される。したがって、浄化のための沐浴は、「水による死」と紙一重であり、三道を行き、[三界]を貫流するガンジス川へ入ることは、天界への門に立つことと、読み取ることができるのではないか。

このガンジス川／ガンジス女神をめぐるエピソードの掘り下げは別稿を期すべきものであり、今はただガンジス川の水を用いての「沐浴」が広くヒンドゥー教世界の中でことさらに重視される背景をたくましく想像するに止めたい。

Rの主役ラーマやシーターをめぐる「沐浴」に目を転じよう。例えばR II-50-12は、ラーマが三道を行くガンジス川と遭遇するシーンを描いている。R III-8-2では、幸福な時代のラーマとシーターの沐浴の風景が描かれる。そして、愛するシーターをラーヴァナに拉致された後のラーマらによるシーター探索の過程で現われるシーターの沐浴習慣を記すR V-14-49「払暁時[の沐浴](saṃdhyā-kāla)」を心掛ける、浅黒き肌の(śyāma)美しい顔の(vara-varṇin)ジャナカ王女(=シーター)は、払暁[の沐浴]の為に、清らかな水を持つ(śubha-jala)この川(nadī)に、必ずや来るであろう」も注目すべきである。

ここで、「受動的沐浴」と言うべき、灌頂(abhiṣeka, abhiṣecana)についても見ておこう。言うまでもなく、R全篇では、ラーマ王子他の「即位のための灌頂」が、しばしば話題に上る。とはいえ、実際の灌頂よりはむしろ、その灌頂の為に用意される水についての言及が圧倒的に多いように思われる。「どこそこの水を、あれこれの容器に入れて用意する」といった類いの記述である。灌頂と言いながらも、水による汚れの浄化としての沐浴との実質的な差異は、ほとんど考慮する必要はないと考える。沐浴は、その者自身の意志にしたがってその者自身が自身の身を清める〈自主的な営み〉である。一方、灌頂は、誰それを王位につけるべくその誰その身を清める営み、すなわち、その者にとっては〈受動的な沐浴〉に過ぎない。灌頂に当たって如何なる水がどれほどの分量用意されるかである。

Rと水、沐浴(2) 沐浴に関連する、基本的用語をまとめて見ておこう。R全篇には、水と同義語として、udaka, salila, vāri, ap, jalaなどの語が用いられている。特に、udakaとsalila/sarilaが頻度の上で多い印象を持つ。水の供給源として川は重要である。通常の女川としてのnadīの他に、男川としてのnadaが現れ

る。川としては *sarit* も頻出する。沐浴場は、むろん *tīrtha*。川の水は流れ流れて海に到る。海は *samudra* か *sāgara*。そのことから、海は、川の主／王 (*pati*) である。また、当然ながら海は水神として知られるヴァルナ神 (*varuṇa*) の住所 (*ālaya*) とされ、海は川の避難所 (*śaraṇa*) と表現される。一方、ガンジス川は海の王妃 (*samudra-mahiṣī*) と表現される。単なる夫人ではなく、第一夫人を意味する *mahiṣī* と呼ばれていることに注目したい。

沐浴のアイテムとして重要視される水だが、清浄な水は貴重な富と考えられた。ヒンドゥー教の世界では、法にかなった供養 (*pūjā*) が尊ばれるが、水をもつての供養が水供養である。飲料用の水 (*pānīya*) の他に、洗足用の水 (*pādya*)、口嗽ぎ用の水 (*arghya*, *ācamanīya*) への言及もしばしば現れる。

むすびにかえて R 全篇中の水と沐浴に関わる用例に基づく本稿だが、あまりに粗雑で忸怩たるものがある。また、全用例を十分に活用し得ていない憾みも残る。思いつくままに以下の五点を記して、結びにかえたい。① X の浄化は X の質料因によってのみ可能。② 沐浴は水より生じた者にのみ有効である。③ 沐浴と灌頂は実質的には別ものではない。④ ガンジス川ないしガンジス川の水の特別の聖性は、「ガンジス女神の降下」などの神話によって保証される。⑤ 沐浴は身体を持つ者の〈浄化〉であり、〈死と再生〉である。

※中村了昭訳『新訳ラーマヤナ』全七巻（平凡社、2012）を全面的に活用させていただいた。記して感謝する。だが本稿所載分はすべて拙訳である。また本稿では作業を水と沐浴に限定し、R の物語そのものには極力立ち入らないよう努めたことを付記する。

〈略号・文献〉

Cs → Jādavaji Trikamji Ācārya, ed. [KashiSS 228]. Varanasi: Chaukhambha Sanskrit Sansthan, 2001.

Ms → J. L. Shastri, ed., Delhi: Motilal Banarsidass, 1983.

R → Wāsudev L. Ś. Paṇṣīkar, ed., Delhi and Varanasi: Indological Book House, 1983.

Ss → P. V. Sharma, ed. [JaikrishnadasAyurvedaS 34]. Varanashi: Chaukhambha Orientalia, 1992.

〈キーワード〉 沐浴 *snāna*, 『ラーマヤナ』 *Rāmāyaṇa*, 灌頂 *abhiṣeka*, 浄化, 水 *udaka*:
ap; *sarira*, 川 *nadī*, 海 *samudra*; *sāgara*, ガンジス川／ガンジス女神 *gaṅgā*
(駒澤大学大学院満期退学)